

諏訪湖のコハクチョウ

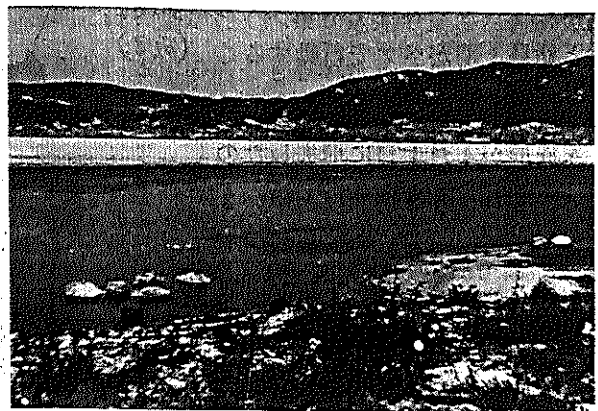
林 俊 夫

昭和 55 年（1980）11 月 11 日諏訪湖北岸の岡谷市横河川河口に 4 羽のコハクチョウが飛来した。いずれも成体であった。この場所は、その当時、岸から道路を越えただけの所に室内プール建設の工事中で、この 4 羽の初認も工事現場の作業員の人であったが、4 羽は工事の騒音や湖岸の道路を通る車などを余り気にせず、私たちが観察に近寄っても警戒せず岸近くのマコモ帯で採餌し、如何にも慣れた様子であり、飛来直後にもかかわらず、その顔の写真も鮮明に撮ることができた。初め私たちは、この 4 羽は、前年まで毎年飛来している成鳥 2 羽と、前年の幼鳥 2 羽が垂成鳥になったものが飛来したものと推察したのであるが、そのくちばしの型（bill pattern）を調べたところ、前年までの成鳥はそこにはいないことが判明した。さては、前年までの家族群と違った群が来たものだが、それでは家族群の方はどうなったのだろうと、14 日に、湖の南岸の諏訪市よし崎に 7 羽の家族群が飛来した。そのくちばしの型から、それらは、前年までの成鳥 2 羽と本年生れの幼鳥 5 羽であることが確認された。

合計 11 羽のコハクチョウの飛来は、今までの最多数であり、私たちは喜んでいたのであるが、この飛来直後の 15 日が狩猟解禁日であった。私たちは、関係方面に働きかけ、白鳥保護に留意するよう依頼した。しかし、15 日朝、モーターボートに乗った狩猟者たちが、湖上を走りまわって、

カモを追い銃声を轟かせ始めると、横河川河口の 4 羽は飛び立ち、一度は少し離れた場所に着水したが、再び飛び立ったまま何処かへ飛去して、以後姿を見られなくなってしまった。一方、南岸の家族群 7 羽も、この狩猟船に驚かされたのであるが、親鳥が今まで毎年経験しているためか、飛去することなく、そのまま居着いたのである。

4 羽の飛去で、がっかりしているところへ 19 日 1 羽の成鳥が飛来し、7 羽の家族群に加った。私たちは、これは先に飛去した 4 羽の中の 1 羽が舞い戻ったものと思ったが、そのくちばしの型を調べたところ、これは前年まで飛来の垂成鳥であり、4 羽とは全然別のものであることが判明した。この垂成鳥は、52 年（1977）に幼鳥で飛来し、53 年（1978）、54 年（1979）の両年にも家族群に入って飛来しているもので、本年で 4 冬の飛来である。



昭和 56 年 1 月 7 日 上川河口にて
（成鳥 2 羽に守られた幼鳥 4 羽の群と
少し離れて眠る成垂と幼 5 号の 2 羽。）

これが、5日遅れて飛来したことは、この意味をいろいろに推測されるのであるが、私は、この亜成鳥は、繁殖期の夏を両親とは別の処で過したが、渡りの季節を迎え、他の亜成鳥などと日本へ渡来したものの、3年越冬の諏訪湖が忘れられず飛来し、両親に再会してその家族群に加ったものではないだろうかなどと想像しているのである。

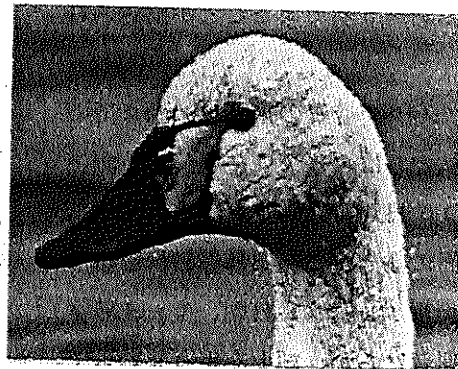
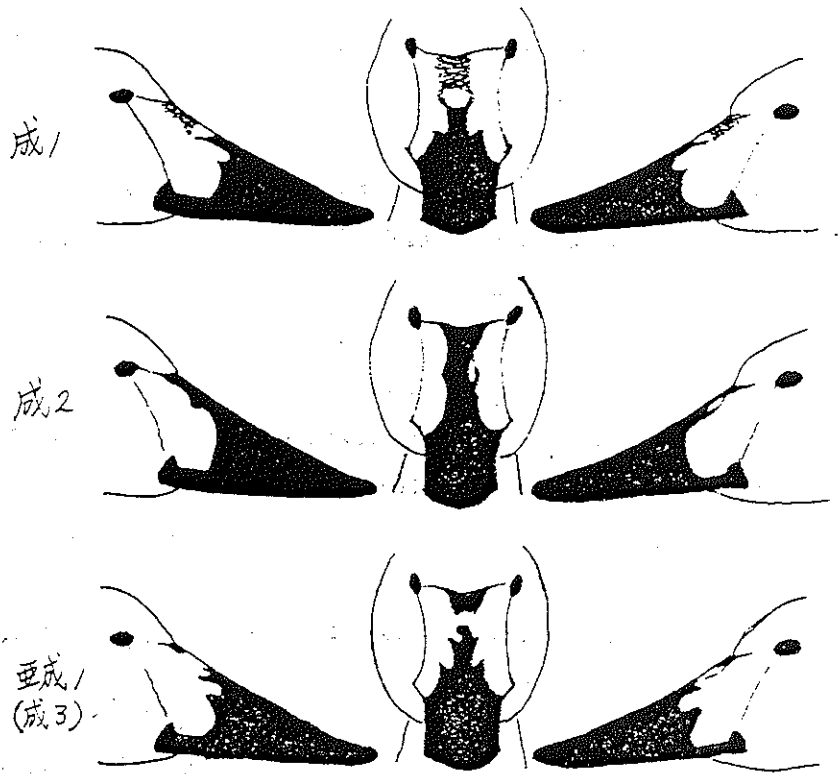
さて、この8羽の家族群は、亜成鳥の加る前は、幼鳥5羽の前後を成鳥2羽が守る形で移動したりする固い団結が見られ、亜成鳥の加った後も当分は、今までの形のどこかへ亜成鳥が入るとい

形で、8羽1団で行動していたのであるが、その中に、亜成鳥と幼鳥5号の2羽が群を離れて採餌するような別行動が目につくようになった。1月に入ったころから、早朝行って見ると、この2羽は、成鳥2羽幼鳥4羽が1団となって眠っているところから少し離れて、2羽だけで仲よく並んで眠っているところが見られ、また、採餌の場合、親鳥がこの2羽を他のものの採餌場所から追い出すような様子も見られるようになった。実は、既報の52年(1977)飛来の群の中でも、やはり亜成長1羽と幼鳥1羽がペアで行動することが見られ、しかもこの2羽は家族群が4月1日に飛去したのに、それより2週間以上早い3月12日に飛去したということがあったのである。本年の場合も、2羽が先に飛去するかなと思って観察していたのであるが、飛去日の近づいた3月下旬ころからはかえって2羽の別行動が

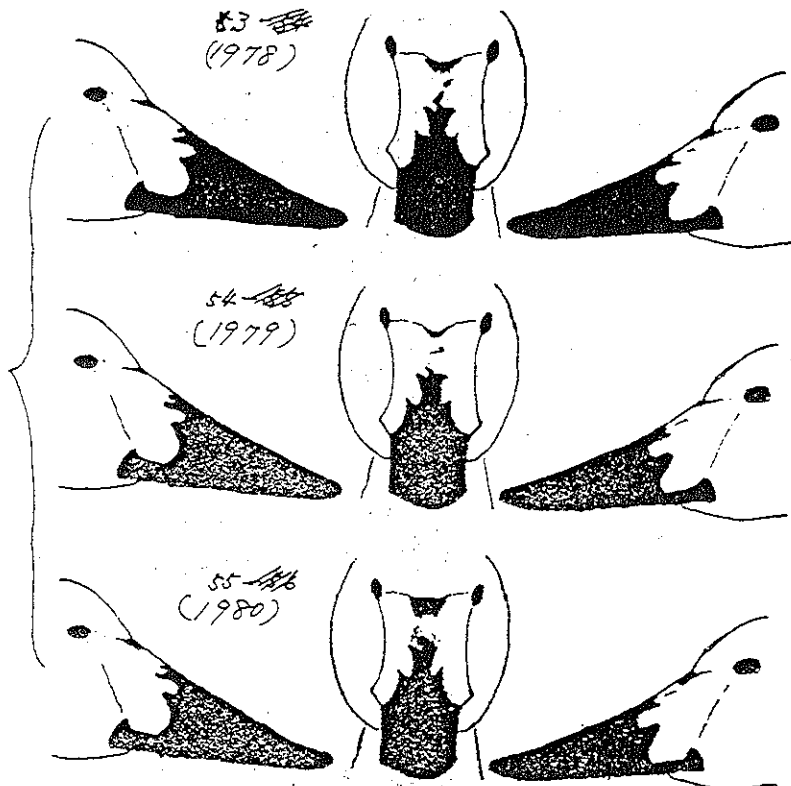
目立たなくなり、8羽1団で行動することが多く、例年より遅い4月8日に、そろって飛去したのである。

ここで8羽のくちばしの型について述べると、次の様である。両親の成鳥の顔は、前年までと同じである。ただ、雄と思われる成鳥2号が12月14日ころけがをして写真のように横に黒い小枝が一つ増し、そのまわりに血をにじませていて、この小枝は黒く残るかと思ったが、その後治癒して元のくちばしの型に戻ったということがあった。(図1)。

図(1) 55(1980)年家族群の成長と亜成鳥



図(2) 53. 54. 55 3 年 の 亜 成 鳥 の
bill pattern の 変 化



次に亜成鳥のくちばしの型であるが、これは、53年(1978)54年(1979)55年(1980)と年々少しずつ変わっていることが分る。しかし、詳細に比べて見ると、その同一性は明らかである。(図2)。スリムブリッジでも、この程度の変化の例はあるようである。ただ第4冬目の独身飛来については、エバンス女史もウィルモア女史も書いていない。本年北へ帰れば、繁殖活動を始める年令になっているわけだが、相手が幼鳥では、繁殖は不可能と思われるので、つがい形成だけで2羽の新婚ペアが、今秋再び飛来するかどうか、それとも、今春飛去途上で他の亜成鳥とペアになり、1年目の繁殖を行い、今秋幼鳥を連れて飛来するかどうか、とにかく、4年連続飛来した諏訪湖へ5度目をどんな形で帰って来るか、来ないか、今秋が待たれるのである。

次に本年の幼鳥のくちばしの型の発達は、図3の通りで、post nareal area と呼ばれる中央部分の変化を追跡することで、その同一性を確かめることができる。今秋どことなくくちばしの型の亜成鳥になって来るか楽しみである。

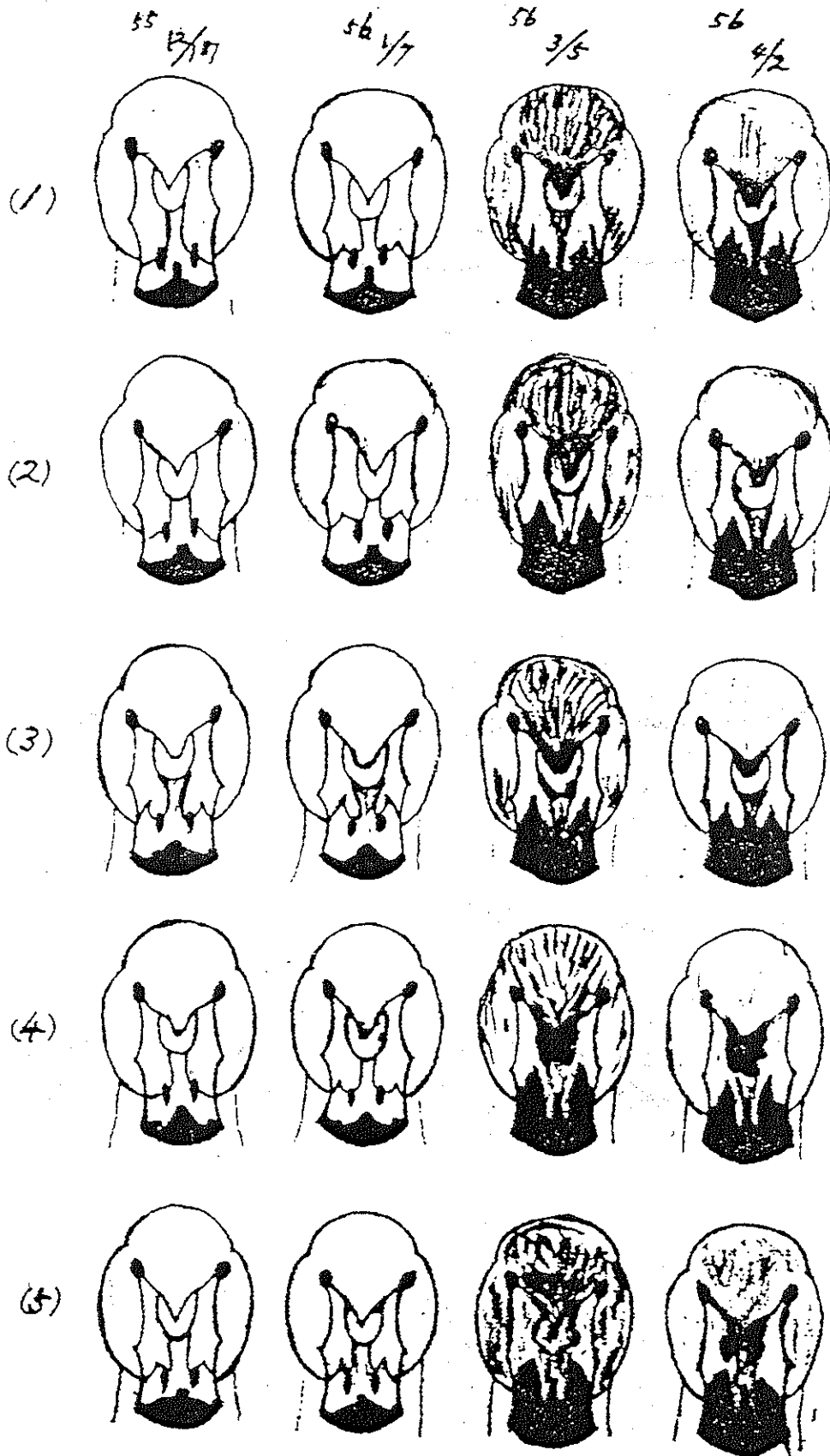
最後に、最初に飛来した4羽のくちばしの型を調べてみると、図4、図5のようで、4羽の中の3羽が前年の幼鳥のくちばしの型の発達したものと認められ、残りの1羽(3号)は他から混入したものではないかと思われる、4羽は亜成鳥群を作って行動していたものと思われる。この4羽の中の3羽が、前年飛来の幼鳥の生長したものであることから、飛来直後より如何に

も環境に慣れた行動をしていたことの原因が分る。横河川河口付近は、前年飛来の場合、彼等が度々採餌に訪れたことのあった場所なのである。結氷期を除き餌も豊富で一寸した洲もあり、休息もできるよい場所であるが、岸の道路を車や人が通ること、東側の湾状部分にカモがよく集るため、狩猟期には猟船が近くへ乗り込んで来ることが欠点であり、本年の飛去もそのためであった。

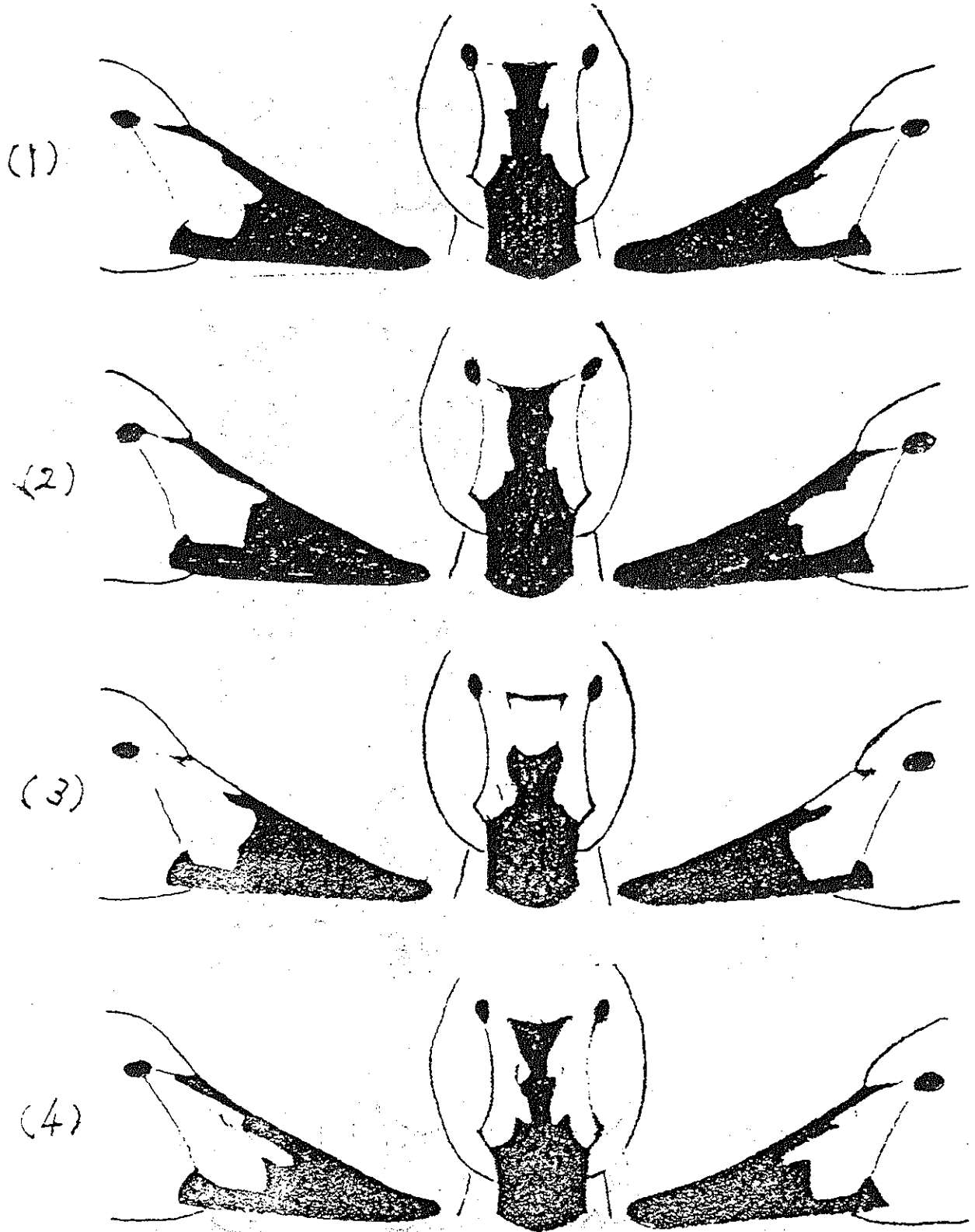
諏訪湖に初めて飛来した亜成鳥群を鉄砲で驚かして飛去させてしまったことは、かえすがえすも残念なことであった。

以上、諏訪湖のコハクチョウの1980年飛来の状況について報告した。

図(3) 55 (1980) 年の幼鳥の bill pattern



图(4) 55 (1980) 年垂成鳥群



図(5) 55 (1980) 年垂成鳥の幼鳥からの bill pattern の発達

